

る嘆息の悲しさ、そしてその深さ。まことに名文中の名文たるにふさわしい結びであることに驚かされる。「ありけんかし」までの前半部と「堀川院の」からの後半部の対照の妙、そして凡作とも見えかねぬ歌と全くの蛇足とも思われかねぬ一文を逆手に使つての筆の冴え、ただただ感嘆するばかりである。

以上、第二六段・第三二段・第三九段・第四八段・第一六二段・第二三六段を取り上げ、これらの章段の鑑賞と分析を通して、徒然草の表現の妙と冴えを明らかにしてきたが、第一段・第三一段・第三八段・第四四段・第四五段、以下等々も徒然草の表現の妙と冴えを読み取らせるみじかな章段である。その鑑賞と分析は稿を改めて試みたい。

(注1) 常識では、なぜそれが有職の振舞なのか、その理由の捉えがたいような伝承がなぜ成立したかについては、拙稿「徒然草第四八段について」(国語国文・昭和五十六年一月号)で推論した。

(注2) 『黒谷源空上人伝』が伝える次の場面を思い合わせると、徒然草第三九段における法然の或人に対する理解の温かさとその温かい理解のことばに接したときの或人の感動のすがたが思い浮ぶであらう。

或時、鎮西ノ聖光房ト聖覚ト、タダ兩人、上人(法然)ノ御前ニテ、浄土ノ法門ヲ聴聞シケル時、聖光房尋ネ申シテイヤク、仰ギテ本願ヲ信ジ、マコトニ往生ヲ願スレドモ、妄念鎮ムルニ起リテ止メガタク、散イヨイヨ倍シテ静カナラズ。此条如何スベク候フヤ。上人答ヘ給ハク、妄念余念ヲモカヘリ

ミズ、散乱不浄ヲモイハズ、タダ口ニ名号ヲ唱ヘヨ。モシヨク称名スレバ、仏名ノ徳トシテ妄念オノヅカラ止ミ、散乱オノヅカラ静マリ、三業オノヅカラ調ヒテ、願心オノヅカラ発スルナリ。然レバ願生ノ心ノ少キニモ南無阿弥陀仏、散乱ノ増ス時モ南無阿弥陀仏、妄心ノ起ル時モ南無阿弥陀仏、善心ノ起ル時モ南無阿弥陀仏、不浄ノ時モ南無阿弥陀仏、清浄ノ時モ南無阿弥陀仏、三心ノ欠ケタルニモ南無阿弥陀仏、三心具スルニモ南無阿弥陀仏。コレスナヘチ決定往生ノ方便ナリ。心腑ニ納メテ忘ルルコトナカレ。

の一語が知らせてくれるが、「妻戸を今少しおしあけて」の「今少し」は、その微妙な心理のゆれから、少しおしあけた妻戸を、さらにもう少し、の気持であり、忍び妻の「或人」との別れを惜しむ綿綿の情が読者にも伝わるが、この情は、「よきほどにて出で給ひぬれど」の「よきほど」の間の行為をうしろに包み、優艶の極みである。表現の妙と冴え、まことにみごとである。

「その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし」、この最後の一行にこもる兼好の思いの深さは、読者の心のうちにも忘れたい感懐を残響させるが、係助詞なしの「侍りし」の連体形止めも、私には筆執る者の小太刀の冴えに思える。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花になれにし年月を思へば、あはれと聞きしことのはごと忘れぬものから、わが世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

されば、白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし。堀川院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根は荒れにけり

つばなまじりのすみれのみして

さびしきけしき、さる事侍りけん。(第二六段)

冒頭の「風も吹きあへずうつろふ人の心の花」が古今集の「桜花とく散りぬとも思ほえず人の心ぞ風も吹きあへぬ」(春下、紀貫之)と「色見えでうつろふものは世の中の人心の花にぞありける」(恋五、小野小町)の二首を出典と

する擬った修辞技法から成る句であり、「白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし」が蒙求の「墨子悲レ糸・楊朱泣レ岐」の故事によっていることはすでによく知られているところである。古人も「つれづれ、おもしろきものなり。古歌故事などをかすませて、二重も三重も上を書きたるものなり。人の心の風も吹きあへぬ、これを風吹きあへぬ心の、と書けり」(耳底記)と賞讃している。本段が、かりに「なげく人もありけんかし」で結ばれていたとしたら、非の打ちどころのない完璧な短章であろう。ところが、実際は、ここで結ばれず、次に堀河院御時百首和歌の中の、どうひいき目に見ても名歌とはいいかねる藤原公実の詠「むかし見し妹が垣根は荒れにけりつばなまじりのすみれのみして」を書き添え、さらに、全くの蛇足である「さびしきけしき、さる事侍りけん」を書き加えている。名文を汚すことはなほだしいものとして削除したくなる者もいよう。しかし、再読し、三読し、「されば、白き糸の染まん事を悲しび、路のちまたのわかれん事をなげく人もありけんかし」のあとに揺曳する残響の中に「むかし見し妹が垣根は荒れにけりつばなまじりのすみれのみして」の公実の詠を位置させるとき、一首として取り出せば並みの歌にすぎぬものが、そうであるからして、「なげく人もありけんかし」のあとの余響の中にそのまま融け込み、その余響を一段と深いものにして、こゝろに気付くであろう。そして、その深まった余響の中で、ぼつんと「さびしきけしき、さる事侍りけん」ともらされ

案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうち薫りて、しのびたるけはひ、いとものはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事さまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見らるるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしまし。あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。

その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。(第三二段)

記事内容に即する限り、兼好は自分より身分の高い「或人」に誘われ、月見の供を仰せつかった。ところが、「或人」は途中で忍び妻のもとを訪ね、戸外に兼好を残したまま立ち去ったことになる。「或人」の供はもちろん兼好だけではない。「或人」のもとに召し使われている供の者もいっしょだったはずである(「案内せさせて」とあるが、取次ぎを乞うたのは「或人」のもとに召し使われている供の者であつて、兼好ではなかつたらう)。ではあつても、出掛けたのは月見であつてみれば、多人数の供の者を連れて行くわけはない。月見は月のあわれを知る者と少人数で出掛けてはじめて月見になる。とすると、誘つた兼好を残したまま「或人」が立ち去るなどということがあり得ようか。兼好の姿が見えなければすぐ気付くはずである。兼好にしても、貴人の誘いをうけて、途中から別行動をとるといふ、

そんな無礼な行動をなし得ようか。「しばし見らるるに」とあるので、忍び妻の「妻戸を今少しおしあけて、月見る」その「けしき」に感動したあと、すぐ兼好は「或人」の跡を追つたとも考えられるが、そう考へても、「或人」が兼好を置き去りにし、兼好も途中で別行動をとつたことには変りはない。本段の記事内容はいかにも不自然である。なぜこんな不自然な内容が記されたのか。このことについては「徒然草の中の兼好の直接体験を記し付けた章段に見当る不自然な内容についての考察」(国語国文・昭和四十九年十一月号)で、視点の移行ということの説明したが、表現の妙と刃えの観点から本段を捉えるとき、ほとほと感嘆させられるのが「妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり」の短行である。

本段の中心人物は「或人」の急の来訪をうけた忍び妻である。彼女に対し兼好は敬語を落して待遇しているが、「或人」の愛人であり、「わざとならぬ匂ひ」から身だしなみのほどが、また「案内せさせて」から身分のほどが察せられる。その忍び妻であつてみれば、ひとり「或人」を妻戸のところまで送りに出たわけではなく、うしろには女房がいたはずである。その女房の手前、月を見るそぶりで、「或人」との別れを綿綿の情をもつて惜しむ、本段のクライマックスを形成するのが、「妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり」である。記さずして読者の脳裡に描かせた女房の位置、そして、その女房に対してはたらく忍び妻の微妙な心理のゆれを「月見るけしきなり」の「けしき」(そぶり)

るを得なかった、そのための感動であったろう。そう思っ  
て、「上人いみじく感じて」の次を読むと、「あなめでたや。  
この獅子の立ちやう、いとめづらし。ふかき故あらん」と  
涙ぐみて、とある。「いみじく感じて」と「涙ぐみて」の呼  
応、前者から後者へのおのずからなる筆の高まり、みごと  
なものである。続いて、「いかに殿原、殊勝の事は御覧じと  
がめずや。無下なり」の、上人の志太の某に対するたらた  
らのお追従に同調した一行にますます気をよくした上人  
は、わざわざ年輩の神官を呼んで、慇懃に獅子の立ち方の  
いわれを尋ねる。「この御社の獅子の立てられやう、定めて  
習ひあることに侍らん。ちと承らばや」である。注意した  
いのは、このことばを言うときだけ「と言はれければ」と  
上人の動作に敬語を添えていることである。この前までの  
上人の動作に対しては、「いみじく感じて」であり、「涙ぐ  
みて」であり、「と言へば」であり、「ゆかしがりて」であ  
り、「呼びて」であって、敬語は全く使われていない。聖海  
上人の社会的地位を思えば、敬語表現をする必要は全くな  
く、前からの筆の流れに従えば、「と言ひければ」でよいと  
ころである。それなのに、なぜ「と言はれければ」と、こ  
こだけに「れ」を添えて敬語表現をしているのか。「れ」は、  
単語としては尊敬の助動詞であるが、文字どおりの尊敬の  
念を兼好が聖海上人に抱いて、その「言ふ」の動作に添え  
たものではない。筆執る兼好の心中に分け入って解するな  
ら、上人に対してはたらく兼好の揶揄の気持の裏返しであ  
り、わざと添えられた敬語にすぎない。問題は敬意のはた

らかぬ敬語がなぜここに添えられているのかだが、それは、  
「いみじく感じて」「涙ぐみて」「と言へば」「ゆかしがりて」  
「呼びて」と書きついできた筆の速度をこの「言ふ」の  
動作にだけ尊敬の助動詞を添えることによって落すため  
であり、筆の速度を落すことによって、どんでん返しの事  
の結末に急転直下するひとつ前の上人の動作に読者の目を  
引き寄せたかったからであろう。得意満面な上人の姿勢を  
強く読者に印象づけたあとで急転直下提示する意外な事  
真相、おかげで、せつかくの感涙が無意味になってしまっ  
た上人の茫然と佇立する、その面容は、読者の脳裡に焼き  
付いて離れない。敬語「れ」を添えることによって筆の速  
度をことさらに落し、読者の目を得意満面な上人の面持ち  
に引き寄せてから、急転直下、事の真相の開示へと一気に  
駆け降りる筆の妙、ただただ感嘆するばかりである。

「大社をうつして」（出雲大社を勧請して）「めでたく」  
造営した神社であり、その社前の獅子（今の狛犬。左右の  
狛犬のうち、左の口を開いた方が獅子、右の口を閉じた方  
が狛犬）であつてみれば、「さがなきわらはべども」（いた  
ずらな子供たち）が簡単に動かせるはずもなく、神官ひと  
りで無造作に据え直すこともできようはずはない。ところ  
が、それができているのは、まず間違いのないうそだが、  
そのうそをうそと感ぜさせぬ話の筋の展開のうまさ、これ  
もまた兼好の筆の力のなせるわざであろう。

九月廿日のころ、或人に誘はれたてまつりて、明く  
るまで月見ありく事侍りしに、おぼしいづる所ありて、

のは「草かる童」であったということ、そしてその童が人に告げ、村の男たちが駆けつけたということは、遍照寺が人里から離れたさびしい環境の中にあつたことを読み取らせるが、さらに寺中に僧のすがたもないところからすると（寺の中に僧がいれば、まっさきに僧に童は告げるはずであり、告げられなくても、僧がまっさきに気付くはずである。というより、僧がいれば、承任法師は僧にはばかり、こんな事件は引き起せぬはずである）、おそらく寺の管理は承任法師ひとりにかかされている廃寺同然のすがたで当時の遍照寺はあつたであろうことを思わせる。そして、「池の鳥」の中に「大雁ども」がまじっていることと鳥どもの悲鳴を聞いたのが「草かる童」であつたことからして、頃は秋、日時のほども思われよう。

一読したのでは思い浮ばぬことを再読し三読するとき思い浮ばせる筆法は第三九段のそれである。「殺すところの鳥を頸にかけさせて」の地獄図も読者の心に突き刺さるが、「基俊大納言、別当の時になん侍りける」の追記にこめられた兼好の思いも、読者の心を捉えて離さぬことであろう。表現の妙、忘れがたい章段である。

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつして、めでたく造れり。しだのなにがしとかや知る所なれば、秋のころ、聖海上人、そのほかも、人あたま誘ひて、「いざ給へ、出雲をがみに。かいもちひ召させん」とて、具しもて行きたるに、おのおのをがみて、ゆゆしく信おこしたり。御前なる獅子、狛犬、背きて、うしろさま

に立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。ふかき故あらん」と涙ぐみて、「いかに殿原、殊勝の事は御覧じとがめずや。無下なり」と言へば、おのおのあやしみて、「まことに他にことなりけり」「都のつとに語らん」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めて習ひあることに侍らん。ちと承らばや」と言はれければ、「その事に候。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りて、据ゑなほしていければ、上人の感涙いたづらになりけり。(第二三六段)

聖海上人に対しては、諸注いずれも「伝未詳」とある。中には「徳大寺公継の男左将実嗣の男聖海と、藤原安範の男聖海がいる。徳大寺家の聖海か」との推測も見当るが、徒然草に実名で登場する人物に対する兼好の慎重な筆を思い合わせると、左将実嗣の子の聖海が本段に登場する聖海上人であるとは、まず思えない。「かいもちひ」(ぼた餅。一説、そばがき)を餌にして誘う「しだのなにがし」(志太の某)も地方での権力者ではあつても下級官吏にすぎなかつたであろうし、それに飛びつく上人一行もその生活の程度が思われよう。聖海上人が「伝未詳」であるのは当然のことであり、「上人いみじく感じて」とあるのも、おのずからの感動ではなくして、誘ってくれた志太の某の厚意に応え、ご機嫌取りをするためにも、上人はいみじく感ぜざ

の教より法然の人柄の方にあったのであろうか。そう思ってみると、最初の法然と或人との問答は、一読したのでは、或人がどんな人なのか、法然は何才ぐらいなのか、二人の問答は、いつ、どこで行われたのか、全く不明であるが、再読し、三読すると、法然と或人のすがたが次第に浮びあがってき、二人の問答のその場の状況が見えてきそうである。「念仏の時、ねぶりにおかされて行を怠り侍る事、いかがしてこの障りを止め侍らん」、この或人の法然に対する問いのことばを、このことばの息づかいに注意して、読者も二度三度口にすれば、このことばがおどおどした口調で法然に問われていることに気付くはずである。「尊い念仏のさ中にこっくりし出すなど、お前の信仰心が足りないからだ。もっと真剣に信仰心を燃やせ」。この意味の叱責のことばの返ってくることはわかっていたはずである。それなのに、こう問わざるを得ない或人は、純朴な下層階級の人であり、昼間のはげしい労働の疲れから、つい夜の念仏のさ中にこっくりし出すこともあったのであろう。あるいは、法然晩年の流罪地讃岐での農夫・漁夫との、家とは名ばかりの小屋のようなところでの、わずかな人数の、夜の念仏のつどいでのことであつたかも知れない。ところが、きびしい叱責のことばが返ってくることを覚悟していたところに返ってきたのは、ねむたい時はねむってよいのだよ、目のさめているあいだ念仏しなさい、の意味の「目のさめたらんほど、念仏し給へ」である。自分たちの生活の苦しさに対する法然のこの温かい理解のことばに接したとき、或人

はどんなに有難いと思ったか、その感動のすがたが目に見えるようである(注2)。

一読したところでは、昼の労働に疲れた或人のすがたは思い浮ばない。法然との問答の時も場所も思い浮ばない。しかし、再読し三読するとき、それがはっきり思い浮ぶのは、はじめからはっきり書くより、書かなくてもわからせられることを、そしてそうすることの方がまさっていることを知っている者の筆なのではなからうか。表現の妙である。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、堂の中まで餌をまきて、戸ひとつ開けたれば、数も知らず入りこもりけるのち、己も入りて、たてこめて、捕へつつ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草かる童聞きて、人に告げければ、村のをのことも起りて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に法師交りて、打ちふせ、ねじ殺しければ、この法師を捕へて、所より使庁へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられにけり。

基俊大納言、別当の時になん侍りける。(第一六二段)  
遍照寺の自然環境にも、事件の起きた日時にも、筆は直接に触れることはないが、「己も入りて、たてこめて、捕へつつ殺しけるよそほひ、おどろおどろしく聞えけるを、草かる童聞きて、人に告げければ、村のをのことも起りて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に」から、それは思い浮ぶ。「池の鳥」の「おどろおどろしき」悲鳴を聞いた

ひ散らされたる衝重を、御簾の中へさし入れられて、まかり出でられにけり」とあった場合と思い合わせれば、文勢と浮びあがる光親像の相違は明白であろう。次には、徒然草に登場する女房の動作には尊敬の助動詞「る」「らる」の添えられている場合とない場合があり、その身分のほどを思えば、ここではその必要のないはずの女房たちの行為に「申し合はれければ」と「れ」を添えていることは、筆の速度をゆるめて、読者の目を女房たちの目に重ね合わせ、院と光親との劇的な対立を読者の眼底に思い描かせる上で効果的である。そして最後に、光親の無礼を大きくつつみ許容する泰然たる院の英雄像を「返す返す感ぜさせ給ひけるとぞ」の結びが浮びあがらせる。それは「返す返す」と最高敬語の「させ給ひ」の語の響き合い、「とぞ」の残す余韻、その悠揚せまらぬ筆致のなすわざだが、そのうしろには、光親の無礼を大きくつつみ許容する泰然たる院の英雄像に惚れ惚れとした兼好の感動が深く宿されていることも見落してはならぬことであろう。

ここまでの推論は、拙稿「徒然草第四八段について」（国語国文・昭和五十六年一月号）で、すでに書き付けたところであるが、このあと、筆者は、次のように書き添えた。

第四八段は推敲の末に成った章段か、あるいは伝承を耳にしてのメモ的な章段かは、容易に明らかにし得ぬが、いずれの場合にも、一段の構成と用語・表現・文勢との関係に目を向けると、この短章の背後に光る兼好の筆の冴えに今更のように感嘆する。古来徒然草が

人口に膾炙されてきた理由のひとつにこの筆の冴えのあることは間違いないことと思う。

ここ数年、教室で徒然草を取り上げているが、前稿で書き付けた兼好の筆の冴え、徒然草の表現の妙と冴えに感嘆することがしばしばである。

或人、法然上人に、「念仏の時、ねぶりにおかされて行を怠り侍る事、いかがしてこの障りを止め侍らん」と申しければ、「目のさめたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。また、「疑ひながらも念仏すれば、往生す」と言はれけり。これも、また尊し。（第三九段）

他力本願の浄土宗の宗義からすれば、最後の「疑ひながらも念仏すれば、往生す」が、念仏の絶対の力に対する絶対の信仰の表明であり、いちばん尊い教であるはずのことなのに、「これも、また尊し」と、そっけない感想しか兼好はもらしていない。二番目の「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」も、信心と往生の関係の急所を突いたことばであり、読者に深い内省をせまる、おそろしいことばであるはずなのに、このことばに対しても、兼好は「これも尊し」としか記していない。ところが、最初の「目のさめたらんほど、念仏し給へ」に対しては、信仰とは全く関係のないことばであるのに、「いと尊かりけり」と、心底からの感嘆のことばをもらしている。兼好の関心は法然

右の疑問に対する答えは、第四八段の本文の中で、兼好自身によって、すでに返答されているように思える。

第四八段の伝承内容を話の筋で要約すると、①光親が最勝講の奉行に励む、②光親の奉行ぶりに感心して、院が供御を賜う、③光親は食い散らして退出する、④女房たちは眉をひそめる、⑤院は繰り返し感嘆する、となるが、⑤が院も立腹し、光親を罷免する、とあった場合と思いが合わせると、本段が何を伝承しようとしているかが明確になる。⑤が院も立腹し、光親を罷免する、とあったら、話の筋としては、③の光親は食い散らして退出するで、危機的状況が現出し、話の山場を構成しながら、構成した山場を④⑤で常識的に処理して、話を尻つぼみのかたちで結んでしまうことになる。⑤は④で常識的に処理した、その処理の駄目押し役しかなさくない。ところが、⑤が院は繰り返し感嘆する、とあることから、③の光親の常識を踏み越えた行動と⑤の常識の埒を越えての院の感嘆とが、④の女房たちの常識的な判断（「あな汚な、誰にとれとてか」と非難した女房たちこそ正常な感覚の持主であり、有職の道からすれば当然の非難なのだ、それが③と⑤の間に位置させられると、急に色があせ、常識的な判断でしなくなる）を中に挟んで大きく対峙することになる。常識の枠外に立ち、自己の感情と判断にゆるぎない自信をもって行動し得る者を英雄と呼ぶなら、まさに光親・院の両英雄像の対峙に伝承間の興味の存することは③④⑤の布置から明白である。兼好もまたこの両英雄像の対峙に心打たれて本段を書き留

めていることは本段の用語・表現・文勢から確かめ得る。

第四八段の特色を用語・表現・文勢の面から捉えようと、対蹠的な用語、対立的な表現で一段が構成され、それと表裏の関係で、文勢は緩急のあやを織りなしていることに気付く。語法的には、「御前へ召して、供御を出だして、食はせられけり」でよいところを、「召されて」「出だされて」「食はせられけり」と、院の行為のひとつひとつに尊敬の助動詞を添えているのは、筆の速度を落し、院の行為のひとつひとつを兼好の筆が確かめ念を入れて書き付けていることを物語るが、それは、「食はせられけり」の語が端的に示す院の上からの押し付けの厚意を読者に印象づける上で効果的である。これに対し、光親の振舞は、次の女房には「申し合はれければ」で「れ」を添えているので、「卿」たる光親の身分を思えば、当然尊敬の助動詞が添えられているはずなのに、「さて食ひ散らしたる衝重を、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり」と、三箇所の動作にすべて尊敬の助動詞を落しているのは（徒然草では「卿」を添えた人物の動作には、光親を除き、他の四人の公明卿へ一〇三段、資朝卿へ一五二段・一五三段、隆親卿へ一八二段、定家卿へ二三八段）の動作には、すべて「る」「らる」の尊敬の助動詞が添えられている、兼好の筆が速度を急にしていることを示すが、それは、「食はせられ」た供御を事なげに「食ひ散ら」し、院の上からの押し付けの厚意を毅然として跳ね返す颯爽たる光親のすがたを読者に印象づける上で効果的である（かりに、院の場合に合わせて、「さて食



## 徒然草の表現の妙と冴え

細 谷 直 樹

### Expressional Subtleties and Clarity of Expression in *Tsurezuregusa*

Naoki Hosoya

#### Summary

Many of the past researches on the reading of *Tsurezuregusa*, a classical Japanese story, have been attempted by focusing on the broadness and profoundness of its texture.

On the other hand, one can hardly ever come across any analytical studies on its excellent descriptive manner.

The present paper will cite six chapters from *Tsurezuregusa*: the six which come after chapter twenty-six. Then, the intention is to clarify, through appreciation and analysis of these six chapters, expressional subtleties and clarity of expression found in them.

Received September 24, 1992

後鳥羽上皇の御所の最勝講の奉行を藤原光親卿が勤めた際のことだが、上皇に召されて食膳を供された光親卿は、食い散らした衝重を、御簾の中に差し入れて退出してしまった。女房たちは眉をひそめたが、上皇は「これこそ故実に通じた振舞で、たいしたものだ」と繰り返し感嘆なさった、という話が徒然草の第四八段に書き付けられている。

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御を出だされて、食はせられけり。さて食い散らしたる衝重を、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり。女房、「あな汚な、誰にとれとてか」など申し合はれければ、「有職の振舞、やんことなき事なり」と、返す返す感ぜさせ給ひけるとぞ。

(本文は光広本へ慶長一八年刊、古活字版を底本とした日本古典文学大系本による。)

「食い散らす」が現代語のつつき散らして食べるの意味の無作法な振舞であることは、女房たちが「あな汚な」と眉をひそめていることから間違いない。故実書『世俗立要集』(鎌倉中期の成立)にも「すべて、晴にも褻にも、盤台の上にまさなげに食い散らす事はすまじき事なり」とある。食い散らした光親の行為が反有職の振舞であることは明白だ。なのに、徒然草の本文に即すれば、後鳥羽院はそれを有職の振舞よと断じている。常識では、なぜそれが有職の振舞なのか、その理由の捉えがたいような伝承(注1)をなぜ兼好は徒然草に書き付けたのか。兼好は何に心を打たれてこの伝承を書き留めたのか。